

地域情報（県別）

【京都】3月に新築移転、今後は整形外科専門病院に生まれ変わる-木原俊彦・京都木原病院理事長・院長に聞く◆Vol.1

映画監督になりたくて芸大受験一筋も、受かったのは佐賀医大だった

m3.com地域版

古刹「東寺」のすぐ近くに位置する京都木原病院（京都市）は、脊椎脊髄疾患の治療をメインで行っている医療機関である。同院は、建造物の老朽化に伴う修繕箇所の増加や耐震改修の必要性などがあり、2024年3月15日に新築移転した。同院の理事長・院長木原俊彦氏は、脳神経外科医でありながら脊椎脊髄手術を専門に行っている。木原氏に脳外科専門医を目指した経緯や脊椎脊髄手術に携わるようになった経緯、新病院の概要や新たな取り組みについて聞いた。（2024年4月15日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら（近日公開）



木原俊彦氏

——木原先生が医師を目指した経緯をお聞かせください。

高校時代は映画監督に憧れており、大学受験は芸大一筋でした。しかし、1982年に3度目の正直で合格したのは、映画監督科ではなく佐賀医科大学医学部でした。私は特に医師になりたいという思いもなく、ただ友達に誘われたことがきっかけで医学部に入学しました。

——医学部に入学後は、映画監督になる夢をすっかり忘れることができたのですか。

入学してからも、映画監督になりたい夢は頭の隅っこに残っていました。しかしそれ以上に救急蘇生や命を救うことに魅力を感じ、漠然と脳神経外科医や心臓外科医なればよいと考えていました。

——大学卒業後からの経歴や仕事内容について教えてください。

1988年に佐賀医科大学医学部を卒業し、同大学の研修医として入局しました。研修医の頃は、土日深夜関係なく24時間365日ポケットベルが鳴るとすぐに大学病院に行く生活でした。給料が少ないため、週末には別の病院で救急当直を行うこともありました。

1991年からの1年間は聖マリア脳神経外科センターの救命救急の現場で働きました。救命救急の現場では、患者の命を救うために全力を尽くしました。しかし、多くの場合、患者が重症の状態になると、植物状態になる可能性が高く、それが家族や私にとって苦悩の種になりました。そして悲しい最期を迎える患者の姿を数多く目にし、無力さと辛さを感じるばかりでした。

1994年に米国カリフォルニア州ロマリンド大学へ留学しました。米国では、脳神経外科手術の7割以上が脊椎脊髄手術であることに私自身が共鳴し、脊椎脊髄手術に携わるようになりました。その後脊椎脊髄手術の症例数を重ねていく中で、手術時間が約5時間と長く、さらに術後の副作用が多いことに気づきました。そのことがきっかけで私は、従来の脊椎脊髄手術より副作用が少なく、手術時間も約2時間短縮可能なK-method（低侵襲頸椎椎弓形成術）を開発しました。

1996年に佐賀医科大学病院へ戻りましたが、国内には脊椎脊髄手術が行える脳神経外科施設がほとんどありませんでした。1999年に私は思い切って医局を飛び出して大津市民病院へ入職し、そこでK-methodによる脊椎脊髄手術の実践をさせていただきました。手術件数が1000件超えた頃には、この手術への信頼度が高まり、その後も全国から患者がこの手術を求め来院され、1万例を達成できました。

2013年4月には、医療法人新和会吉川眼科病院と経営統合し、京都脊椎脊髄外科・眼科病院として名称変更し理事長・院長に就任しました。その後病院名を京都木原病院へ変更。2024年3月には新築移転しました。

——京都木原病院の歴史と概要について教えてください。

当院は、2013年に京都脊椎脊髄外科・眼科病院へ名称変更してから、2018年に眼科医の吉川太刀夫氏が眼科クリニック開設により独立され、京都脊椎脊髄外科・眼科病院は京都木原病院へと名称を変更しました。そして、2024年3月15日に、旧病院から新病院へ新築移転しました。

現在の京都木原病院の病床数は47床、診療科は脊椎脊髄外科を主に展開しています。今後は、脊椎のみならず膝・股関節などの人工関節を中心とした整形外科の専門病院に生まれ変わる予定です。職員数は新病院への移転に伴い増員中で、現在は約50人です。医師は常勤5人（脳神経外科医4人、麻酔科医1人）、非常勤は夜間当直のアルバイトのみです。

京都木原病院（旧病院）の脊椎脊髄疾患の手術実績は、2022年度が611件、2023年度が623件です。また2023年度の1日平均における患者数は外来が38人、入院は35人です。このうち京都府以外の患者割合は73%です。

——新病院の構想は、前身の京都脊椎脊髄外科・眼科病院を開業された2013年当初から持っていたそうですね。

私自身、開業前は大津市民病院の手術部診療部長として勤務しており、病院経営は未知の分野でした。開業と同時に理事長・院長に就任した当初病院経営は手探りの状態でしたが、10年ぐらいい験を積みれば多くのノウハウを得られるだろうと考え、そのタイミングで新たな病院を建てることを決めていました。

——新病院の特徴について教えてください。

新病院は、地上6階建てで、延べ床面積は約5058平方メートルと広大な敷地を有しています。JR京都駅から徒歩8分です。



京都木原病院

また、院内の設計は、これまでの私の経験から得た知識を反映しています。その1つが、計47床の完全個室にこだわり、その過半数を無料個室にしています。

以前の病院では大部屋がありましたが、室内の温度調節やいびきなどの音によって、患者同士の関係性に問題が生じることがありました。そのため、新病院では患者のプライバシーと快適さを重視し、完全個室を採用しました。個室にすることで、患者同士のコミュニケーションを妨げる要因を排除し、環境の質を向上させることができると考えました。



病室

——広大なリハビリ施設も完備されたそうですね。今後どのような計画があるのでしょうか。

屋内では、30メートルダッシュができるスペースも確保し、プロスポーツ選手やオリンピック選手のリハビリに対応できるようにしています。

リハビリスタッフには、メジャーリーガー・前田健太投手が行っているストレッチ「マエケン体操」を考案した荒木和樹氏を招き、現在多彩なリハビリプログラムを考案中です。また、スポーツ栄養の指導ができる栄養士を積極的に採用しています。



リハビリ室

——医師の採用については、ご苦労などありますか。

現在在籍中の常勤医師4人の採用については、副院長の西岡和哉氏と赤塚啓一氏は、大津市民病院勤務時代共に働いていた同志で、早く当院で働くことを了承してくれました。また岩下英紀氏は、私と同じ佐賀医科大学医学部出身で、脊椎専門医を目指しており、同大学病院の医局をわざわざ飛び出すまでして私の病院に来てくれました。このよ

うに、ご縁に恵まれ新病院をスタートすることができましたが、同じような志を持つ医師に1人でも多くこの事業に参画していただきたいと考えお待ちしています。

また、今後整形外科専門病院として生まれ変わる予定ですので、整形外科専門医を現在募集しているところです。一般的には整形外科専門医の採用は難しいとされていますので、以前のように知り合いや、出身大学の友人もたどっていくつもりです。

——整形外科専門病院へ生まれ変わるという決断をされた背景にはどのようなことがありますか。

当院のような脊椎・脊髄専門病院で多くの患者を診察していると、膝や股関節の悪い患者が多くいます。そのような患者から、脊椎・脊髄を良くしてもらったのでこの病院で膝や股関節の痛みを治してもらえないかと頼まれます。そういった背景から脊椎・脊髄専門病院に加え、膝や股関節などの四肢運動器の治療を行えば、同じような症状で悩まれている多くの患者の手助けができると考えました。

——現在、課題と感じていることはありますか。

当院は、京都府内の患者割合が27%（2023年度）と少ないです。そこで、脊椎脊髄疾患の早期発見、予防を目的とした、年1回の脊椎ドックを推奨しています。2023年度の脊椎ドックの受診者は315人で、京都府外の方が多かったです。今後は、「100まで歩こう」をスローガンに京都府内を含めた受診者が、脊椎脊髄の症状がない時から脊椎ドックを受けてもらえるように啓発していきたいと思えます。

◆木原 俊彦（きはら・しゅんいち）氏

1988年佐賀医科大学（現：佐賀大学医学部）卒業後、佐賀医科大学脳神経外科研修医入局。その後、佐賀県立病院好生館脳神経外科研修医入局。1989年同大学研修医（脳神経外科、消化器外科、麻酔科、胸部心臓外科）。1990年有田共立病院脳神経外科入職、1991年聖マリア病院脳神経外科入職。1992年佐賀医科大学（現：佐賀大学医学部）医員入局後、同大学文部教官助手。1994年米国カリフォルニア州ロサンゼルス大学留学。1999年大津市民病院脳神経外科医長入職。2005年同病院診療局手術部診療部長（兼脳神経外科医長）就任。2013年医療法人社団親和会京都脊椎脊髄外科・眼科病院（現：京都木原病院）理事長・院長就任。

【取材・文＝田中 嘉尚（写真は病院提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

